

東亜同文書院生が見た “パリ”

——優雅さ、退廃、そして近代性——

“Paris” in The Great Journeys of Toa Dobun Shoin College:
Elegance, Decadence and Development

岩 田 晋 典

IWATA Shinsuke

愛知大学国際コミュニケーション学部

Faculty of International Communication, Aichi University

E-mail: shinskito@gmail.com

Abstract

In the Great Journey Journals, the research diaries of tour-style fieldworks written by Toa Dobun Shoin College students, several Asian cities were addressed as “Paris of the East” or “Little Paris”. This study examines the discourse of “Paris” and points out that it can be classified into three different patterns. Firstly, some students who visited Hanoi or Saigon depicted the cityscapes with stereotypes of Frenchness and used the word “Paris” to emphasize elegance and gracefulness of the French colonial cities. Secondly, Harbin sometimes is described as a hedonistic metropolis of decadence under the name of “Paris”, associating immorality and vice with the Shanghai French concession called “Paris of the East” at that time. Finally, Taipei or Dalian are called “Paris” in some cases by praising their advanced feature of urban planning, which image originates apparently in Haussmann’s renovation of Paris in the previous century.

1. はじめに

東亜同文書院生が学業の集大成として実施した調査旅行「大旅行」（以下、大旅行調査）において、都市は食料などの物資の補給場所であるほか、情報や査証類の収集場所であり、また、過酷な村落部を通過した後に待っているオアシス的な休息の場所でもあった。

表 「大旅行誌」における“パリ”

旅行年	期	執筆班・執筆者	都市	事例
1916	14	關外班	大連	「巴里を小さくした町の構造」 557
1918	16	兩広湖南班	台北	「今やこの小巴里が」 297
1922	20	廣東駐在商業調査班	台北	「私は台北市を見て、小巴里と言ふのを、惜しまない」 685
1925	22	印度支那班	ハノイ	「湖を中心とした所謂小巴里と云はるる区域」 285、「所謂小巴里街」 289
1927	24	仏領印度支那經濟調査班	サイゴン	「仏人は此の町を小巴里と呼んで居る」 256
1928	25	仏領印度支那東京經濟調査班	ハノイ	「小巴里と謳はれる仏人區は大廈高樓軒を接して」 182
		交趾支那調査班	サイゴン	「仏蘭西人は小巴里と呼んで居るだけあつて、美しい都である」 321
		連奉浜駐在調査班	ハルビン	「第二の上海。そして極東の小巴里」 407
1929	26	(班名不明)	ハルビン	「かつて東洋に移された、小巴里」 361
1931	28	南支印度支那遊歴班	ハノイ	「プティラック湖畔は所謂小巴里と云はれる地域」 233
1931	28	南支印度支那台湾遊歴班	ハノイ	「立ならぶ濡酒たる欧風都會河内を東洋の小巴里」 525
1932	29	第三班	ハルビン	「東洋の巴里哈爾賓に遊び」 145
		伊藤正彌	大連	「巴里風？な街」 454
1934	30	(満洲方面に向かった全書院生の合同執筆)	ハルビン	「エロ、ハダカオドリの都、東洋のパリー」 14
1937	34	北満洲班	ハルビン	「今日のハルピンは最早や『東洋の巴里』でもなく」 214、「北満の巴里ハルピン」 215
		仏領印度支那暹羅班	サイゴン	「流石は東洋の小パリー」 247
1938	35	第三班 (暹羅)	サイゴン	「東洋のパリと云はれる街」 329
1939	36	タイ国班	サイゴン	「金にあかした東洋の小パリーの称ある西貢の市」 353

注) 事例内の数字は、『東亜同文書院大旅行誌』シリーズの各巻における記載ページを示す。

さらに東亜同文書院というビジネススクールの学生であった書院生にとって、旅行先の土地土地で進展していた近代化も大きな関心の対象であり¹⁾、都市訪問の記述は調査日誌「大旅行誌」の中で大きな部分を占めている。

都市の記述は多様であるが、その中で、訪問した都市を「小巴里」や「東洋のパリー」というように、“パリ”という言葉で形容するケースが複数回確認できる(表)。たしかにこれらの形容は、フランスのパリを訪問したという実体験に基づくものではなく、よくある言い回しや定型句を利用したものと解釈したほうがよさそうなものばかりであるが、い

1) 調査日誌「大旅行誌」の記述に見られる書院生の近代性への強い関心については、台湾の調査日誌を対象に分析を試みた別稿(岩田、2017)を参照されたい。

くつかの意味を用いて“パリ”という言葉が用いられていることが見て取れる。

本稿の目的は、こうした“パリ”という言葉を用いて都市を描写する記述に焦点を当て、“パリ”という言葉でアジアの都市を表現する語り（以下、パリ言説）を検討することにある。この作業は、書院生のパリ観の考察であるとともに、彼らの都市経験を探る試み、さらには近代日本における都市イメージを考察する試みの一環と位置づけることができよう。

以下では、“パリ言説”の第一のパターンから第三まで、順に検討をしていく。

2. フランス文化の象徴

パリ言説の第一のパターンは、フランスの植民地の大都市を記述する際に用いられるものであり、ハノイとサイゴン²⁾の記述に見られる。カンボジアのプノンペンなどの他のフランス領植民地都市では見られない。フランス植民地の中心地であった両都市には少なからずの書院生が訪れている。とくにハノイは多くの書院生が訪れた街であった。というのも、東南アジア方面の大旅行調査において、ハノイから雲南方面に向かう、もしくは南下してサイゴンさらにバンコクに向かうルートは数多く実施され、そこでハノイはハブの役割をはたしていたからである³⁾。

このパターンでは、簡単に言えば、ハノイとサイゴンはフランス的な大都市だから“パリ”となる。順に見てみよう。ハノイでは、ホアンキエム湖周辺とくに西岸部が“パリ”と見なされたようだ。今日でもセント・ジョセフ教会が残る一帯である。1925年にハノイを訪れた第22期生・印度支那班は五頁を割いてハノイでの体験を綴っており、「湖を中心とした所謂小巴里と云わるる区域」（ホアンキエム湖周辺）を次のように描写している。

大商店、劇場ホテルなどが櫛比してゐる。そして如何にも落ち着きがある。湖の対岸を馬鹿に長い電車が走つて行く。湖畔には緑樹繁り宛然の公園の様である。（第17巻：285）

歓楽の夜の河内は美しい。オーケストラの奏楽が聞えて涼をとる男女がカフェーのソファに談笑してゐる。姚婉たる美人とシンザノのグラスの交響楽が奏せられて夜の河

2) 本稿では「大旅行誌」での記述にならない、「ホーチミン市」ではなく「サイゴン」という名称を用いる。

3) 東南アジア方面の大旅行調査については（加納、2017）が詳しい。

内は酣になつて行くのであらう⁴⁾。(ibid.: 289)

このように、商業、交通、公園、娯楽といった複数の要素を総合してフランス的な街の雰囲気全体的に描くという方法は、以下の抜粋の多くにも共通するやり方であり、その三年後にあたる1928年訪問の第25期生・仏領印度支那東京経済調査班のハノイに関する記述にも当てはまる。

小巴里と謳はれる仏人区は大廈高楼軒を接して、往来繁く、殊に午後四時頃のグランド・マガサンの辺りの賑ひは又格別である。虹児の絵にでも現はれそうな気持の良い程に伸びたフランチュ、レデーの軽快な靴の音。(以下略) (第20巻: 182)

「虹児」とはおそらく路谷虹児のことであり、また、「フランチュ、」は「フレンチ・」の誤植と思われる。

さらにその三年後1931年にハノイを訪れる第28期生・南支印度支那遊歴班は、「流石に東京の首都、印度支那を統治する地であるからして仏蘭西人の施設完備し殊にプティラック湖畔⁵⁾は所謂小巴里と云われる地域であつて大商店、劇場ホテル等櫛比して居る」(第23巻: 233)と記し、大建物が連なる街並み、緑豊かな街路樹、フランス人紳士淑女の様子、カフェや劇場について報告している。さらに「燃ゆる様な情熱を傾けて若い男女は恋でも語ると云う」(ibid.: 234)というように、今日でも通用する花の都パリのロマンティックなイメージも確認できる。

サイゴンに対して“パリ”という形容を用いるケースでも、基本的な図式に変わりはない。第34期生・仏領印度支那暹羅班は1937年にプノンペンにつづいてサイゴンを訪問し、「流石は東洋の小バリーと云われるだけあつて、綺麗な町だ」(第29巻: 247)と記している。

1927年にサイゴンを訪れた第24期生・仏領印度支那経済調査班は次のようにサイゴンの風景を描いている。

仏人は此の町を小巴里と呼んで居る。彼等の誇とするひろびろとした美しい路の両側には、合歓、アカシア、タマリンド等の街路樹の滴る様な緑の葉が、強い熱帯の日に照らされて、濃い影を路上に落としている。桃色と白のだんだら染めの暖簾の廂を張出したカフェーの、路上に置き並べた椅子に腰ををろし、冷たいボックを飲みながら

4) 「大旅行誌」は全33巻にシリーズ化されている(愛知大学、2006)。本稿では、煩雑さを避けるために「大旅行誌」からの引用については丸括弧で「大旅行誌」シリーズの巻番号とページ数のみ記している。また「大旅行誌」には誤字脱字が多々見られるが、本稿では原文に忠実に記載している。

5) ホアンキエム湖の植民地時代の名称。

雑談に時を過ごす。仏人の群れ、整った家並、仏蘭西式に飾り立てられたショーウィンドの調和した色彩、私は一寸上海のアベニュー、ジョフルの夏を思ひ出した。(第19巻: 256)

上海のフランス租界の中心地 Avenue Joffre (現在の淮海路) を想起したという記述が目を引き。フランス人とフランス風の街並みを通じて上海のフランス租界を思い出すという連想は、上海暮らしが長い書院生にとっては当然のことと思われるかもしれない。「ボック」がドイツのラガービールの一種 Bock を指していると推測できるとしても、だ。

けれども、次章で紹介する第二パターンにおけるパリと上海の結びつきと性格が異なることからすれば、こうした単純とも言える連想もわざわざ指摘しておく意味がある。第一のパターンがフランス的な優雅さ・華麗さに基づくとすれば、第二のパターンはむしろ西洋的大都会の虚栄や退廃が結びつける連想であるからだ。なお、仏領印度支那経済調査班はハノイにも立ち寄っているが、ハノイの記述ではパリ言説は見られない。

その翌年にサイゴンを訪れた第25期生・交趾支那調査班もパリ言説を用いてサイゴンを描写しているが、仏領印度支那経済調査班の記述ときわめて類似したものとなっている。

仏蘭西人は小巴里と呼んで居るだけあつて、美しい都である。全市は、合歓、アカシヤ、タマリンド等に埋められ街路を藪ふ此等の樹木は緑のトムを形作り、見るからに須賀須賀しい思ひがする、其の間に桃色と白のだんだら染めの暖簾の廂を張出したカフェー、椰子の若実バナナ等を吊した土人の店、其の間を行きかふ、白い絹の日覆ひをかむつた安南乙女、仏蘭西人、頗る静かな眺めである。(以下略) (第20巻: 321)

「大旅行誌」の出版年が連続したものであること、同じ都市についての記述であることも含めて考えると、現代で言えば交趾支那調査班の記述は剽窃に相当するものである。当時は剽窃に対するタブーがゆるやかなものであったと推測できるし、また、名文に倣うことが評価される教養的实践が現れたとも解釈できるかもしれない。すなわち、現代であれば、アカデミックなコンテクストで決まり文句的な陳腐な表現を使うことはまず避けるよう教育されるが、教育が大衆化していなかった当時は、そういった表現や語句の使用はむしろ教養の一部とみなされたと考えるのも行き過ぎではあるまい。

ここまで紹介してきた事例は、褒めると言えば言いすぎかもしれないものの、ハノイとサイゴンのパリらしさを好意的に描いたものであった。次に紹介するのは、華やかなフランスらしさが過酷な植民地支配の上に成り立っていると非難・告発する手厳しい記述である。

仏蘭西女のそぞろ歩きも緑にはえて美しい。道の砂利は真赤にそめてあつて、周囲の緑に浮き出て見える。芝生に入れば罰金だとか、一にも二にも金だ。金にあかした東洋の小パリーの称ある西貢の市は、成る程その建築たるや宏壮、優美である。フランス式の瀟洒たる住宅、夢の様だ。仏印総督の官邸は公園の様だ。だがその陰に軒下に、しひたげられ、絞り取られ、疲れ果てて無智から無智への世界に追ひ込まれ、終には老へる力もなく只僅かに獸的享樂を追つて行く、生ける屍の如何に多く横たはることか。此處西貢は殊に此の感が深い。路傍と言はず、軒下と言はず焼ける胸をひやさんとするか、横たはる黒い土人のうごめきがある。それを踏みつけぬばかりにして白人女のハイヒールが通る。何もかも矛盾だ、顛倒だ。救はるべきものなりや否や？ 眼頭にあつきものを覺える。(第31巻: 353)

これは、1939年にサイゴンを訪れた第36期生・タイ国班によるものである。この後に、西洋による不当な植民地支配を日本が中心になって防衛するという意気込みが続くとしても、違和感のないくらい強烈な批判である。同班は、その後南下し、タイを訪れており、その記述の中でタイが「華僑と白人の素手に圍まれ、ダニに食はれ乍らも」持ちこたえていと称え、さらに「我が頼もしき盟邦として東亜守護の爲に、光榮あるその獨立を維持して頑張つて貰ひ度いものである」(第31巻: 380)と期待をかける文章を残している。大日本帝国の「大東亜新秩序」的な思想を、アジアを旅行する若者がどのように内包していたのかを考える上で興味深い箇所である。

旅行中にハノイとサイゴンの両方を訪問する場合、両方に対してパリ言説が用いられることはなく、どちらかに限定されるようだ。1938年に両都市を訪れた第35期生・第三班(暹羅)はハノイに対しては、ホアンキエム湖畔やダンスホールへの言及はあるものの「海防に比較して遥かに活気のある町」と描写するにとどまっている一方で、その直後に訪れたサイゴンを「濃緑に赤い屋根がよく調和しておちついた感じだ。東洋のパリと云はれる街である」(第30巻: 329)と描写している。

対照的に、ハノイに対してのみパリ言説が用いられる場合もある。第28期生・南支印度支那台湾遊歴班は、1931年に訪れた両都市を次のように比較している。

人口二十萬と云はれ、池畔に彩影を映じて、立ならぶ瀟洒たる欧風都會河内を東洋の小巴里を賞讃する人は多いが、そしてこの河内が濃厚な脂粉に、額の小皺をかくし、圓筒に近い胸を突出し、豊かな肉体の仕末に困り果てたかのやう、されども優勝国人の虚勢を主張つて歩むマダムの群を現出するに對し、支那人の財力を代表する飽迄現実的提岸とが面白い對照をなしてゐることを我々は考へさせられざるを得ぬ。実に印度支那在住支那人の財力はこの提岸に集り、これによつて代表されてゐると云つても

過言ではない。(第23巻: 525-526)

この対比は次のように言い換えることができよう。ハノイには華やかなフランスらしさがあるが、同時にそれは見せかけの程度の強い、虚しいものでもある。一方サイゴンにはそうした外見上の華麗さはないが、経済力があり、実質的なパワーの面ではハノイより優れている。そしてその象徴がサイゴンの華僑街・「堤岸」(ショロン)である——。「小巴里」ハノイに対する眼差しは否定的なものであるが、ハノイを「小巴里」とする認識図式が、「欧風」の街並みであったり、またたとえ虚勢を張っているとしても「マダム」であったりするというように、ハノイのフランスらしさの上に成り立っている点は、先に紹介した複数の事例と同じである。

このように、パリ言説の第一のパターンは、壮麗な建築物、瀟洒な住宅、湖水・緑・公園、音楽、カフェ、ロマンティックな恋という記号で構成される“麗しき花の都パリ”というイメージに基づいていることが分かる。

こうしたパリイメーは、現代にも通じるものであるが、すでに当時の旅行メディアでも利用されていたものである。1937年に発行された雑誌『旅』には、「仏領印度支那紀行」という署名入り記事があり、ハノイが「東洋の巴里」として紹介されている(稲葉、1937)。

東洋の巴里と云はれてゐる街だけあつて、實に隅から隅まで美しく都市計画された街である。(中略) 池畔のカフェのテラスに湖面を流れるフレンチタンゴのリズムに咽喉をうるほしたレモナードの味、朝に東洋風の瞑想美を夕べには歐風の華美な旋律を、ともに忘れがたい思ひ出である。(ibid.: 106)

また、1942年に財団法人南洋協会が「南洋の事情或は南洋地方への旅行に関する調査照會」(南洋協会、1942: 1)に応えるために刊行した旅行案内書『南洋案内』では、パリ言説はハノイではなくサイゴンに用いられている。すなわち「市街は巴里を模倣して建設されてゐるので、小巴里といはれてゐるほど街衢は整然としてゐる」(ibid.: 580)とし、緑豊かな街並み、ノートルダム寺院、ルネッサンス式の旧官邸、広場から真直に伸びる大通り、郵便電話局や劇場、ホテルなどの建築物が紹介されていく。さらに「堤岸」の項では、「西貢が街衢整然、仏蘭西風の瀟洒たる都であるに反し、ショロン市は純然たる支那街にして、耳を蔽ふばかりの喧騒の大市場(ショロンは大市場の意味である)である」(ibid.: 584)というように、「堤岸」と対比する形でサイゴンのフランスらしさが強調されている。

日本人が多数暮らしていた上海で学生生活を送っていた書院生がこうしたメディア・コ

ンテンツに接していた可能性を思うと、すでに頭の中にあった“パリらしさ”や“フランスらしさ”に合致するものをフランス植民地に見出し、それを追認して記述したと推測するのが妥当に思われる。

いずれにしても、この第一のパターンに表れる“パリ”が、住宅から恋愛までを含む日常生活に関わる記号で構成されている点は強調しておきたい。第二・第三のパターンと比べて、第一のパターンの特徴はここにあると考えられるからである。

3. 西洋の退廃的な大都会

第二のパターンは、都市のフランスらしさやパリらしさに基づくのではなく、退廃的な雰囲気に注目したものである。このパターンはハルビンに限定されるといっても過言ではない。

ハルビンには、何よりもまず“ロシア（人）の街”というイメージがあったが⁶⁾、“東洋の巴里”といった表現も、ハルビンを言い表す定型句のようなものになっていたようである。たとえば、1929年訪問の第26期生（班名不明）は、「キタイスカヤ街の夕立」⁷⁾という節で次のようにかつてのハルビンの姿を懐古している。

哈爾濱の印象を拾ふ。其れには先づキタイスカヤ街だ。

私達ちが、かつて東洋に移された、小巴里——。東洋のシヤンゼリゼーとして、受け入れた、キタイスカヤ街も、只過去の華やかなりし名残りを止めてゐるに過ぎない。
(第21巻: 361)

また、1932年にハルビンを訪れた第29期生・第三班は「新都新京に満洲国新興の風貌をきはめ、東洋の巴里哈爾賓に遊び」（第24巻: 145）として、「新都新京」と対句的に記述する際に「巴里」という表現を用いている。

しかしながら、ハルビンについてのパリ言説は、メトロポリスたるハルビンの快樂に満ちた退廃的な在り様を強調するときに特徴的なものとして現れる。たとえば、1928年に訪れた第25期生・連奉浜駐在調査班によれば、ハルビンは魔都上海に準ずるレベルにあるようだ。

6) 戦前に出版された旅行案内書の中にもハルビンをパリではなくモスクワとして描いたものがある。たとえば、マンチュリヤ・デリー・ニュースが発行した旅行案内書『満洲の旅』では「東洋のモスコイ国際都市」（大原、1940: 343）と形容されている。

7) 「キタイスカヤ街」は現在のハルビン市中央大街のこと。

ハルピン—不思議が不思議でない町。あらゆる人種と美しい罪の市場。第二の上海。そして極東の小巴里。(第20巻: 407)

前章ではフランス植民地の優雅な風景から上海のフランス租界が連想されるという記述を見たが、ここでは、ハルビン・上海・パリが「罪」を介して結び付けられている。上海のフランス租界は、天津と漢口のそれとともに「東洋のパリ」や「小パリ」と呼ばれていたが、それは前章で検討した第一のパターンの意味での“パリ”ではなく、麻薬・賭博・ポルノ・売買春が氾濫した退廃的な大都会、「裏社会の活動が頻繁な、犯罪率も高い奇形の繁華地区」(費、2006: 242-243)としての“パリ”であった。

1934年訪問の第30期生らは、「エロ、ハダカオドリ」という、いっそうあからさまな表現でその“パリらしさ”を描いている。

東支線の中央、南部線の発端、松花江うねる中原の地、かつて白露政治家の夢見た第二のモスクーの地哈爾賓、近くは反革命勢力の根城たりし地、今は東洋に於ける赤の根城。そして商業中心地、満洲の大坂でもあれば、エロ、ハダカオドリの都、東洋のパリーでもあるのだ。駅前であつたそのエキゾチックな精彩に見せられる。(第25巻: 14)

この記述ではハルビンが“白露政治＝モスクワ”、“商業＝大阪”とともに、“エロチシズム＝パリ”と説明されているのが興味深い。また、1937年にハルビンを訪れた第34期生・北満洲班は、満洲国以前のハルビンを「ハルビンの思い出」という節の中で次のように描いている。

ハルピン——なんと印象的なことよ、今日のハルピンは最早や「東洋の巴里」でもなく、又「東洋のモスクー」でもあり得ない。そのハルピン夜話時代を遠く過去に葬り去つて、今や新興満洲国の一心臓として躍動しつつある。(第29巻: 214)

北満の巴里ハルピンの夜はキヤバレーに異国情緒の花を咲かす。誰かがハルピンは遊覧の町ではなく歓楽の町だと云つたが、それは事変前のハルピンであつて、すでに社会情勢の変化した今日、いつまでもロマンチックな町としては存在できなくなつて了つた。かの裸踊りとキヤバレーとの歓楽境としてのハルピンを知りその歴史的発展の事実と今日の政治、経済的情勢とを理解せぬ者にはハルピンの真相は想定把握出来ないであらう。

宵はキヤバレー夜明けはペチカ弾けよ恋しのパラライカ。(ibid.: 215)

すなわち、ハルビンの「真相」を理解するには、「今日」の政治経済的状況だけではなく、かつてハルビンに存在した、「異国情緒」に溢れた歓楽的な“夜の世界”も視野に入れなければならないというのである。そしてそうした快楽的な都市性を示す表現として「北満の巴里」が用いられている。

以上のように、パリ言説の第二のパターンはハルビンに限定されたものであり、かつ、都市の快楽的で退廃的な様相に焦点を当てたものであり、大都市が持つ悪しき側面を描くために“パリ”が用いられている。また、第25期生・連奉浜駐在調査班の記述にみるように、こうした“パリ”から上海が連想されることもある。それは、村松梢風が1924年に発表した小説の中で描いた上海像と共通するイメージであり（劉、2010）、フランス租界の近くで生活していた書院生が思い出さないはずがないものだったと考えられる。

この“悪徳の都”というようなパリのイメージは、前章で論じたフランス製の象徴としての“パリ”と大きく異なるものであるし、また次章で検討を加える第三のパターン、すなわち近代都市の象徴としての“パリ”とも相容れないものである。

4. 近代的な計画都市

第三のパターンは、台北や大連の記述において見られるものであり、フランス的な優雅さでも、大都会の快楽・退廃でもなく、近代都市的なイメージに基づくものである。たとえば、第16期生・両広湖南班は1918年、華南を周遊する調査の中で台北に立ち寄り、「台北の印象」という節の中で台北を「小巴里」（第12巻: 297）と呼び、次のように述べている。

台北の町に就いて述べれば、全々新設市街にして、邦人の都市経営としては完全に近い、市区は整然として、アスファルトの大道が四通八達し其両側には規則正しい同型のルネッサン式の建物がズラリと並列しておる所などは、上海香港でも見られない、其上美しい公園や図書館、博物館などもある、其他功勞者のために立てたのだらう、銅像がそこにも、かしこにも、つつ立つておる、新平蛮爵のキツト威張つた銅像など至る所にあつた（ibid.: 299）

また、その4年後にあたる1922年に福州から基隆経由で台北に入った第20期生・廣東駐在商業調査班は、わずか四行の一節であるが、「小巴里」というタイトルで台北を次のように描写している。

私は台北市を見て、小巴里と言ふのを、惜しまない。布區整然としてアスファルト路

は四通八達し其の両側にはルネツサン式の建物が並んでゐる所などは、一寸他處には見られない景色である。市内には諸々に公園あり噴水あり、以つて遊子を楽しめ、一日の勞を醫するに充分である。(第15巻: 685)

これら第16期生と第20期生の記述は、誰の目から見ても明らかであるように、整然としたアスファルト道路やルネサンス式の建築物からなる部分の記述が酷似したものとなっている。第2章で紹介したサイゴンの記述の事例と同様の関係を推定できる。

近代的な景観から台北を“パリ”と形容する記述は、「大旅行誌」だけではなく、同時代の旅行メディアにも確認できるものだ。たとえば、台湾総督府鉄道部による『台湾鉄道旅行案内』では、確認できるものだけでも1924年、1930年、1940年、1942年のものでパリ言説が用いられている。以下は1924年版の記述である。少々長くなるが、調査日誌の記述との類似を示すために、該当箇所を引用しよう。

舊城内の地は、主として内地人の居住者大部分を占め、新領土の首都としての行政上・經濟上の諸機關は勿論、公園・圖書館・博物館等各種の文化的の設備具はり、市街は、煉瓦乃至鐵筋コンクリート造りの三層樓を以て連ねられ、幅員十間のアスファルトの坦道は市街を縦横に貫通してゐる。市區の中心には二萬三千坪の公園あり、市街を包圍する幅約二十五間乃至四十五間より成るリングガーデンには、遊歩道を設け、所々に、配する圓形若くは半圓形の綠園を以てし、其の瀟洒たる感じは、東洋の小巴里と稱するも過言でなからう。(台湾総督府鉄道部、1924: 47-48)

他の三カ年の版でも、1924年版と基本的に同じ内容であり、フランス性は言及されず、近代的な都市の構造が強調される。むしろ1930年版では「近代文明都市として他に多く類例を見ない立派な外觀」(台湾総督府鉄道部、1930: 62)という文言が加わったり、1940年版では「三線道路」(台湾総督府鉄道部、1940: 58)という語句が挿入されたりというように、説明がより詳しいものになっていく。

こうした事実は、台北を“パリ”と形容することが当時珍しくなかったことを示唆している。さらに、台北に対するパリ言説は日本語メディアにかぎらず英語メディアにも存在した可能性も指摘しておきたい。1938年に発行された雑誌『カメラと旅』の記事「樂土台湾」に「東洋有數の文化都市臺北(誰かパリ・オブ・ゼ・イーストと何かに書いてゐた)」(安藤、1938: 31)という記述が見られる。国際都市上海で暮らし、英語を学んでいた書院生が英語の旅行案内書に触れていたことも十分に考えられることであろう。

では、こうした“近代都市の象徴としてのパリ”という認識図式の出どころはどこにあるのかというと、それはやはり19世紀後半にナポレオン三世の治下、G-E. オスマンによっ

て進められた“パリ改造”であろう⁸⁾。この事業は「パリの外科手術」と言われ、不衛生で犯罪や騒擾の温床でもあったスラム的な都市空間を破壊し、直線的な視野の開けた街路が規則正しく交わり緑あふれる近代都市に建て直す一大都市改造であった。

また、単なるインフラ面での変換だけにとどまらず、消費文化とも深く関連し、博覧会と百貨店という二つのスペクタクル的展示が結びつく基盤となった（吉見、1992: 92）。すなわちこの大改造は、パリを「帝政を荘厳化する巨大な舞台装置」（ibid.: 67-68）に変換し、「帝国の首都としてふさわしい機能と壮大さをもつ都市」（藤田、1993: 93）へと一変するものであった。

“パリ改造”の理想は、ベンヤミンの言葉を借りれば「長く一直線に伸びる道路による遠近法的な展望」（ベンヤミン、2003: 26）であるが、より具体的には、街路、建物、公園、公共事業（上下水道など）という四つの要素で構成されていた（サールマン、1983: 21）。それはいわゆる“バロック都市”であり、日端によれば、バロック都市のデザインの特徴は、1）開放的の広場、2）直線的な広い大通り、3）壁面建築（ファサード）、4）都市公園とランドスケープデザインの四点にあるという（日端、2008: 191-197）。

オスマンが改造した近代都市パリは、こうしたバロック都市の完成型、すなわち「ルネッサンスからバロックに進化したモニュメンタル（記念碑的）な都市デザイン原則の集大成」であった。たしかにオスマンのパリ改造については、改造当時から批判も少なくなく、その是非についてさまざまな議論がなされてきたが⁹⁾、そうであるにもかかわらず、権力あるいは国威発揚の象徴として世界中の都市が模倣した一つの理想形となり、「その後、大規模な都市計画といえば、バロック的なものであった」（藤田、1993: 93）。

後藤新平が主導した台北の都市整備も、こうしたバロック都市にほかならない。1908年台北城内の中心部に台北初の公園を開設し、1910年には城壁を撤去し、跡地を三線道路として整備、また西門以外の城門はランドマークもしくは文化財として保存することが決定している。さらに、1913年と1914年にはファサード・亭仔脚を持った街並みが導入されている（越沢、1993: 189）。書院生の記述からも分かるように、銅像も複数立てられていた。

後藤新平が台湾や満洲に導入した都市計画は、越川によれば「近代日本都市計画の源流」の一つであり、「今日に至る内地の近代都市計画の制度（都市計画法）と事業（帝都復興事業など）の基礎をつくる」（越沢、1993: 186-187）ものであった。

またその後の1935年に台北中心部を主会場に台湾博覧会が開かれた事実も、近代的な

8) Haussmann のカタカナ表記には「オスマン」と「オースマン」があるが、参考文献からの引用箇所に ついては当該文献の表記にならい、それ以外の箇所では「オスマン」で統一することにした。

9) 詳しくは（サールマン、1983）を参照されたい。

バロック都市の影響の一つとして考えるべきである。整序され美化された台北は、パリのよう「博覧会都市」（吉見、1992）として帝国日本の国威を示す装置となることが求められた。こうしてみれば、書院生が単なる都市景観について記しているだけではなく同時に公園や博物館などの施設も含めて描写していることは、近代的な高等教育を受けたエリート予備軍として当然の行為であったと考えてよからう。

大連についても同様の構図を見出すことができる。第14期生・關外班は、1916年上海から大連に移動した後、大連の近代的な街並みについて次のように記している。

中央の大広場を車の轂にして播磨町、西通、奥町、東公園町等の幹線道路が東西南北に輻輳し大小の街衢が更に縦横に連る。巴里を小くした町の構造だ。（第10巻: 557）

ここでも大きな広場や放射状・格子状に整備された街路を持つ都市の在り方に基づいてパリ言説が用いられている。同じように、1927年に大旅行調査を実施した第29期生の「大旅行誌」（『北斗之光』）には30名近い書院生の作文からなる「満洲国印象記」という章があり、そのうちの一つを執筆した伊藤正彌は大連を「近代的都市」、すなわち舗装路が整備され洋風建築が調和する「巴里風？な街」と描いている（第24巻: 454）。

大連は、日本統治期にも都市整備事業が実施されたが、それ以前のロシア統治下でパリをモデルに造られたものだという（小泉、2015: 48）。戦前に出版された旅行案内書でも、大連のバロック都市的な部分は強調すべきものであった。大連の中心部「大広場」には、里程標と初代都督大島義昌の銅像が立ち、「芝草の緑も晴々しく植樹の色あでやかに、春は桜、夏はダリヤ、秋は菊に藤、冬は銀花。四季とりどりの色に飾られて」（大原、1940: 12-13）いる。それを囲む十街区のうち七街区には日本の国家機関や日本資本の銀行といった日本による支配と関係のある建物が配置されていたというように、「大広場」は「支配の象徴」（西澤、2011: 13-23）であった。すなわち「大広場」は統治者の空間であり、緑に溢れ、里程標から街路が放射状に伸びる一つの“世界の中心”だったのである。

前述のように、パルピンについての記述では、近代性ではなく西洋的な大都会としての性格に基づいてパリ言説が使用されていたが、歴史的な事実としてはハルピンはバロック都市的な都市計画に基づいて建設された都市であった。たとえば越川は、ハルピンの都市計画は、19世紀末に試みられたさまざまな都市建設の中でも「先駆的なものに属すると判断してよいのではないかと述べている（越川、1989: 84）。

このように、パリ性に関する「大旅行誌」の記述は、“近代的なバロック都市＝パリ”という認識図式に基づいたものだった。近代教育を受けた書院生がこうした認識図式を備えていたことはなんらおかしいことではない。また、バロック都市が近代的国民国家の象徴であったことも見過ごすべきではない（多木、1994: 101-104）。“パリ”という参照点に

言及しつつ近代的国民国家の統治が具現化された景観について述べることは、教養として近代性を有することが期待された帝国日本のエリート予備軍にとっては当然なすべき行為であったとも考えられる。

ただし近代都市的な要素があれば必ず第三のパリ言説が現れるというわけではないことも指摘しておく必要がある。たしかに“パリらしさ”の記述がなされるうえで、パロック的な都市性が重要であるものの、そういった都市構造が“パリ”と描写される絶対的な基準になるかと言えば、けっしてそうとはかぎらない。台北を訪れた班の調査日誌を全体として捉えると、パリ言説を用いているものはむしろ少数派だと言える。

この点で満州国の首都新京の記述も興味深い。新京は、南満州鉄道株式会社が広大な付属地で「日本本国の最先端の技術と人材」（橋谷、2004: 45）を投入して建設に取り掛かった近代都市であった。調査日誌の中には、たとえば「車站を中心に、街路放射状に延び、線のテリハドロに埋まる森の町」（第30期生・満洲方面に向かった26班の合同執筆「壮途に上る」12）というような記述も存在するが、パリ言説は用いられていない。近代的な都市計画に基づく街並みが即座に“パリの”となるわけではない。

ただし、新京の記述からは、パロック都市的な性格がパリのと形容される条件が程度の問題であったと考えることもできる。何かの要素が欠けていたのかもしれない、もしくは、全体として“パリらしさ”が不十分であったためにパリ言説が用いられなかったという解釈である。たとえば先に紹介した第30期生・26班は、次のように新京の発展途上性を記している。

昼の新京はほこりの町。荷車とトラックと貨物の重量が搔き起すほこりである。一日三十車の建築材料が着くと云ふ。役所も会社も塵埃を浴びる仮事務所かと云ふ。そして日進月歩、国都計画の頁がめくられつつある。（第25巻: 13）

以上は、記述が生じる要因を都市の物質的側面に求めた説明であるが、それとは別に、テキスト間の相互参照性も無視することができない。先に紹介したように調査日誌間には無視できないほどの類似性を示すものがある。また、これもすでに言及した点であるが、パリ言説は同時代の旅行メディアにも散見する。台北の記述の中でパリ言説を用いるものが第16期生と第20期生の調査日誌に見られるということは、この二つ以外では用いられていないということでもある。その背景として、両期生が調査を実施した1920年前後の時期に台北に対してパリ言説を用いるメディアが手に入りやすい形で流通していたと推測することもできよう。

「大旅行誌」が一般書として当時の出版市場に流通しなかったことを考えれば、「大旅行誌」の記述を旅行メディアが利用したとは考えにくい。むしろ逆に、書院生が大都会上海

をはじめとするもろもろの都市で接した旅行言説を調査日誌の執筆の際に用いたと考えるべきであろう。パリ言説が定型句的・決まり文句的に用いられる箇所は、そういった書院生のメディア経験から率直に表れたものとも言えるのかもしれない。

5. おわりに

以上本稿では、東亜同文書院生が大旅行調査で訪問したアジアのいくつかの都市を“パリ”として描く記述に焦点を当て、パリ言説の意味内容を検討してきた。パリ言説は三章に分けて論じたように三つのパターンに分けて説明することができる。

第一は、フランス的な優雅さに基づくものである。そこでは、緑あふれる街並み、壮麗な建築物、瀟洒な住宅、公園、音楽、カフェ、ロマンティックな恋という記号を用いて風景を描写し、“麗しき花の都パリ”としてハノイかサイゴンのいずれかが“パリ”となる。

第二は、西洋的な大都会の快楽・退廃に基づくものである。この言説はハルビンに限定されている。エロチシズム、エキゾチシズムが強調され、ハルビンが“快楽に満ちた悪徳の都”と描かれる。また、こうしたイメージを介して書院生が慣れ親しんだ上海が言及されることもある。

第三は、近代的な都市景観に基づいて都市を“パリ”と形容するものである。このパターンは、台北や大連の記述で確認できる。19世紀の“パリ大改造”が生んだ“近代的なバロック都市パリ”というイメージを、植民地で近代的な都市計画に基づいて建設された台北や大連に見出し、“小巴里”や“東洋の巴里”という表現が用いられる。

こうしたパリ言説が用いられた都市は、ハノイやサイゴン、ハルビン、台北そして大連というように限定的である。けれども、本稿で検討してきたように、一定のパターンが確認できるレベルの言説を形成しているのもしかである。また、たびたび指摘してきたように、他の「大旅行誌」や同時代の旅行メディアとの間にテキスト面での類似性も確認できるが、それは当該の言説が奇妙なものと思われされたり、信憑性を疑われたりせずに、真正なものとして流通していた証左だと言える。

参考文献

- 愛知大学 2006『東亜同文書院大旅行誌』（オンデマンド版）雄松堂出版
 安藤公乙 1938「樂土台湾」『カメラと旅』第2巻第8号、30-31頁
 稲葉熊野 1937「仏領印度支那紀行」『旅』第15巻第1号、102-107頁
 岩田晋典 2017「大調査旅行における書院生の台湾経験：“近代帝国”を確認する営み」加納寛編『書院生、アジアに行く：東亜同文書院生が見た20世紀前半のアジア』あるむ
 大原要 1940『満洲の旅』マンチュリヤ・デリー・ニュース
 加納寛 2017「書院生、東南アジアに行く!!：東亜同文書院生の見た在留日本人」加納寛編『書院生、ア

- ジアを行く：東亜同文書院生が見た20世紀前半のアジア』あるむ
- 小泉京美 2015『大連の日本人社会』和田博文・黄翠娥『〈異郷〉としての大連・上海・台北』勉誠出版
- 越川明 1989『哈爾濱の都市計画：1898-1945』総和社
- 越沢明 1993『台湾・満州・中国の都市計画』浅田喬二・他編『岩波講座 近代日本と植民地 3 植民地化と産業化』岩波書店
- サールマン, H. 1983『パリ大改造：オースマンの業績』（小沢明訳）井上書院
- 多木浩二 1994『都市の政治学』岩波書店
- 南洋協会 1942『南洋案内』南洋協会
- 西澤泰彦 2011『植民地建築紀行：満洲・朝鮮・台湾を歩く』吉川弘文館
- 橋谷弘 2004『帝国日本と植民地都市』吉川弘文館
- 費成康 2006『中国における各国租界の特色』大里浩秋・孫安石編『中国における日本租界：重慶・漢口・杭州・上海』御茶の水書房
- 日端康雄 2008『都市計画の世界史』講談社
- 藤田弘夫 1993『都市の論理：権力はなぜ都市を必要とするか』中央公論社
- ベンヤミン, W. 2003『パサージュ論』（今村仁司訳）岩波書店
- 吉見俊哉 1992『博覧会の政治学』中央公論社
- 劉建輝 2010『魔都上海：日本知識人の「近代」体験』筑摩書房